

八世紀前半の唐・突厥・吐蕃を中心とする国際情勢——多様な外交関係の形成とその展開——

菅 沼 愛 語

はじめに

本稿の目的は、主として八世紀前半の安史の乱勃発以前における唐・突厥・吐蕃の三国を中心に、外交という視点から、東部ユーラシアの国際情勢の全体像を可能な限り把握し考察する事にある。八世紀前半の東部ユーラシアは勿論、唐が中心ではあるが、北の突厥、西の吐蕃が強大な勢力を持ち、甚だ非対称ながら三国が鼎立する形勢であった（図1参照）。

このような状況は七世紀後半に形成された。七世紀の中頃までに唐は東西突厥・高句麗といった周辺の強国を滅ぼし、北方・東方の脅威を順次取り除いていった。しかし唐が六六八年までの高句麗討滅に専念している間に西方では吐蕃が積極的に西域に侵攻し、東西交易路を脅かし始めた。西域の掌握は唐にとって非常に重要であったが、七世紀後半、唐はその覇権を巡って吐蕃と争奪戦を繰り返したが、唐軍の四度の大敗が新羅・突厥・渤海等の周辺諸国に自立への動きを促進してしまい⁽¹⁾、特に六八二年に再興した突厥は、その後北方の大きな勢力へと発展した。

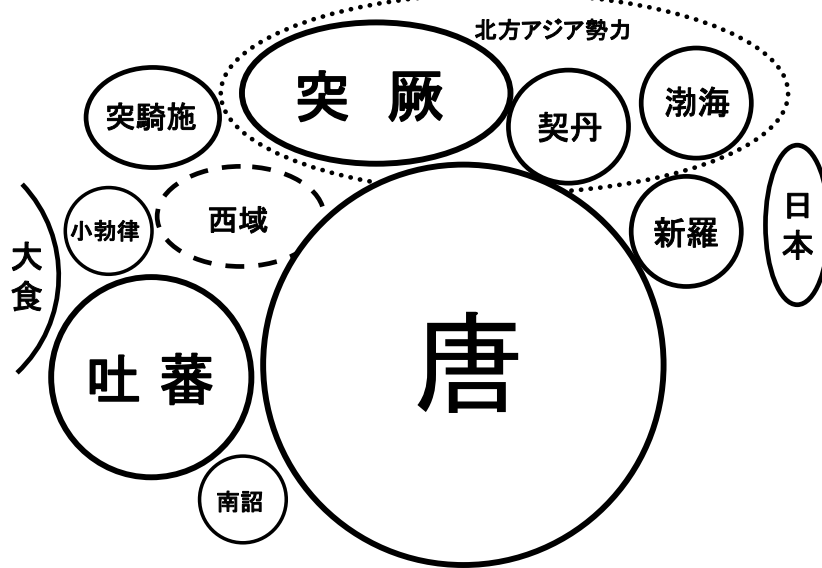
八世紀前半の東部ユーラシアは、大国の唐に対抗する形で、北方では突厥、西方では吐蕃が中心となって、隣接する諸国・諸族が合従連衡し複雑に展開していった。唐は、安史の乱以前は東部ユーラシアに覇権を

築いて四囲に勢力を保ち、開元の治と称される繁栄と平和・安定を享受した。また突厥と吐蕃は各々の勢力下に諸族を抱え、その地域での覇権の確立と勢力拡張を画策した。いずれも軍事力で対決すると同時に活発な外交戦略も用いた。例えば唐は、七一〇年の節度使創設によって辺境防備を強化すると共に、時には突厥と和睦して吐蕃を牽制し（開元十五年（十七年）、時には吐蕃と和して突厥対策に専念した（開元二十一年（二十三年））。対する吐蕃・突厥も、例えば、吐蕃は突厥・突騎施・大食等と、突厥は契丹・渤海等と連合して唐と交戦するなど、隣接する諸勢力との連繋によって唐への対抗を試み、その過程で複雑で多様な外交関係が形成されていった。

また、大局的には、複数方面での戦争を避けようとする唐の対外政策の方針に起因して、例えば西方の情勢が北方や東方の趨勢にも影響を及ぼすなど、離れた地域の間にも大域的な相関が生じた。総じて北方は国防上の、西方は東西交易路を含めた経済上の重要地域であるが、八世紀前半の唐が北方と西方の二大勢力と対峙する事で、相対的に東方への関心が薄れ、唐からの干渉と脅威が弱まった事は、東方の新羅・日本を安定へと導いた。

この時期の唐・突厥・吐蕃の外交に関しては、これまで唐の対外政策、唐と突厥・吐蕃各々の外交、突厥・吐蕃間の外交という視点で取り上げ

図1：8世紀前半の東部ユーラシア世界の概略図



られ、我が国の研究としては例えば以下のような先行研究がある（紙幅の都合上、ここでは日本の先行研究のみを取り上げる）。吐蕃・突厥間の外交や連繫に関しては、佐藤長氏と森安孝夫氏が、西域進攻の際に吐蕃が突厥・突騎施・大食等と連合した点を取り上げ論じている。唐と突厥の外交については、護雅夫氏が突厥と唐の力関係を両国の名分関係から分析した。東アジア・北アジアの国際情勢の相関については、古畑徹氏が七三〇年代の

唐・渤海紛争を契丹・突厥・新羅の動向とも連動させて論じている。唐の外交については、金子修一氏が国際文書の分析等を通じて唐の外交政策を論じている²。

本稿では、先行研究の諸成果を総合しつつも、地域と地域を横断的に見る事で、異なる地域に対

する唐の政策に類似性や系統性がある事、これまであまり指摘されなかった諸国間に相関がある事などを明らかにしたい。とりわけ筆者は、開元二十年（七三二）から開元二十三年（七三五）の四年という短期間に、唐が突厥・吐蕃・新羅各々の間で以下のような重要な外交交渉を集中的に行っている点に注目した。

突厥（第二可汗国）に対しては、唐はキョル・テギン（闕特勤）碑文（開元二十年建碑）とビルゲ（毗伽）可汗碑文（開元二十三年建碑）の立石に各々協力した。両碑文はトルコ民族最古の文学であり、遊牧民族史上初の文字資料としても重視されているが、玄宗はキョル・テギン碑文の漢文面を自ら撰文書写し、石工や画家も派遣して両碑文の立石のみならず廟の建設や壁画の作成にも助力した。その事は、漢文史料と突厥碑文の記述、最新の考古学的な学術調査の成果等によっても明らかにされている³。

吐蕃に対しては、唐は開元十八年（七三〇）から二十一年（七三三）にかけて和睦と会盟の為に交渉を行い、開元二十一年、両国の境界に決まった赤嶺（青海南）に碑を建て、碑石の上には盟文も刻み、国境線と盟約内容を視覚的に明示した⁴。本稿では、この会盟を開元会盟、境界碑を赤嶺碑文と呼ぶ事にする。

また新羅に対して、唐は勅命に従って渤海を討伐した褒賞として、開元二十三年、大同江以南（旧百濟領の全てと旧高句麗領の一部）の領有を正式に承認し、対渤海の防衛の為に大同江に駐屯する許可を与えた。これをもって、井上秀雄氏は新羅が唐より独立国として承認されたこと意義付け、末松保和氏は新羅の郡県制が完成に向かったと見なし、木村誠氏と李成市氏は対渤海の边防組織が構築されたと考察した。唐による大

同江以南領有の正式承認は、新羅にとって政治・軍事・外交上の画期的な出来事であると評価されている⁵⁾。

こういった一連の動きを俯瞰し簡単に総括すると、七世紀の唐は周辺諸国を次々と滅ぼし無制限に領土拡張を推し進めたが、八世紀前半になると、各方面との勢力が均衡し、その結果、国境の劃定や領土の承認によつて、唐が周辺国家の存続を認めた上で、唐を中心とする国際秩序の構築がなされていったとも言えるだろう。

本稿は、『旧唐書』『新唐書』『冊府元龜』『資治通鑑』等の基本史料に加えて、宰相張九齡の文集『曲江集』に残る玄宗の勅書や、『文苑英華』の制・露布等にも基づき論考した。先行研究の成果を取り込みながら、八世紀前半の唐を取り巻く国際情勢の全体的な理解を試みたいと思う。尚、本稿では、突厥・契丹・奚⁶⁾・渤海の唐の北方の勢力を「北方アジア」と総称する。また、突厥・吐蕃に対する唐の外交戦略については「表」、開元二十年から二十三年の間の複雑な国際情勢の流れについては第四章の図2の【図A】～【図D】を、同じく開元二十年から二十三年の細かい時代の流れについては「年表」を参照しながら読み進めて頂きたい。

第一章 八世紀前半の吐蕃と突厥および唐の外交戦略の概観

八世紀前半、唐にとって対外政策の中心は吐蕃と突厥であった。吐蕃は七世紀後半、西域の覇権を巡って唐と攻防戦を繰り返し、この時の四度の唐の大敗が周辺諸国の自立活動の契機にもなった。突厥は六三〇年、唐によつて一旦滅ぼされ、約五十年間唐の羈縻支配下に服したが、六八二年に再興し、吐蕃の強盛と契丹の反乱（六九六年～六九七年）を契機

に基盤を強化して契丹と奚を属国となし、震国（渤海）も勢力圏に置いた。この時期の吐蕃と突厥は唐にとって非常に脅威だった上に、この二国は連合して唐を襲撃する事もあった。八世紀前半、史料で裏付けられる吐蕃・突厥の連繋や両国の使者交換等は以下の五度である。

①長安元年（七〇一）、吐蕃と突厥は連合して涼州（甘肅省）を挟撃した⁷⁾。

②開元六年（七一八）十一月、吐蕃の使者は玄宗に対し、突厥と使節交換を行なっている事、唐の出方次第では突厥と連合する可能性もある事を示唆した⁸⁾。

③開元八年（七二〇）、突厥の使者がラサに赴いて吐蕃王に敬意を表した⁹⁾。

④開元十五年（七二七）九月丙戌、突厥が、吐蕃の密書（瓜州挾撃を提案）を玄宗に献上した¹⁰⁾。

⑤開元十五年閏九月、突厥に向かう吐蕃の使者を涼州都督王君奭が遮断した¹¹⁾。

吐蕃・突厥に対して唐の行った対抗策は、節度使を設置して国防を強化し、吐蕃と突厥の入寇に備える事であった。初の節度使となる河西節度使を涼州に設置した理由の一つが『資治通鑑』卷二二五・天寶元年正月条によれば吐蕃・突厥間の連繋の遮断にあった事からも、唐が吐蕃・突厥の連合を危険視した事が分かる。边防強化に加えて、唐は外交によつて二正面作戦の回避を画策した。唐は六七八年、新羅征伐を断念して対吐蕃戦に集中しており¹²⁾、七世紀後半の唐が両面作戦の危険性を理解していた事が分かる。八世紀前半の唐も、外交によつて一方と和し、他方への兵力集中を図るという戦略を取って吐蕃・突厥に対応している。そ

れは以下の三回であると筆者は考えている。

①景龍四年（七一〇）正月、唐は金城公主を吐蕃に降嫁させ、五月には突厥討伐令を下した。

②開元十五年（七二七）、唐は突厥と和睦し、開元十六年（七二八）より吐蕃を集中攻撃した。

③開元十八年（七三〇）から二十一年（七三三）にかけて、唐は吐蕃と和睦交渉し、突厥・契丹・渤海の三国連合に対応した。

この三度の唐の外交戦略を考察する事で八世紀前半の東部ユーラシアの国際情勢を明らかにしたい。まず次章で景龍四年前後の唐の外交戦略、第三章で開元十五年前後の唐の外交戦略、第四章と第五章で開元十八年以降の唐の外交戦略を各々取り上げ考察する。

第二章 唐と吐蕃の和睦・神龍会盟・公主降嫁と唐による突厥包囲作戦… 神龍二年（七〇六）～景龍四年（七一〇）

吐蕃では長安四年（七〇四）、王のチルドゥーソン（器弩悉弄）が反乱した南境諸族を鎮定中に陣没した。新王のチデツクツェン（棄隸誦贊）は幼少であった為、吐蕃は唐との和睦を望んだ。中宗はこれに応じ、唐と吐蕃は神龍二年（七〇六）、会盟した。この会盟を、本稿では神龍会盟と呼ぶ事にする。唐と吐蕃は滅亡までに十回近い会盟を行なっているが、これが最初の会盟である。神龍会盟の詳細は不明な点が多いが、黄河を境界となす事が決められたようである。会盟の翌年（景龍元年＝七〇七）には金城公主（中宗の兄の孫娘）がチデツクツェンに嫁ぐ事が決まり、景龍四年正月、公主は吐蕃に降嫁した¹³。吐蕃へは貞観十五年（六四二）、

文成公主（宗室女）が初めて降嫁したが、金城公主は中宗の姪孫であり、唐が吐蕃との通婚をより重視している事が窺える。

唐が吐蕃に譲歩した背景には、突厥への兵力集中という軍事上外交上の目的があったと考えられる。その事は、唐が神龍会盟の直後より以下の様な突厥対策を展開している点からも推し測れる。中宗は会盟を結んだ同じ年の十二月、勅書を下し、突厥可汗默啜の殺害者への官職授与を約束した。翌年（景龍元年＝七〇七）正月には突厥平定策を上奏するよう群臣に下命し、武芸の超絶した猛士を募兵した。景龍二年（七〇八）三月には、六旬（二ヶ月）の突貫工事でオルドスの黄河北岸（内蒙古自治区）に三つの要塞・三受降城を築いた。このため突厥は以後、漠南に入寇できなくなった。更に景龍二年から景龍四年にかけて、中宗は反突厥であった突騎施・キルギスと連合し、突厥の包囲計画を練った¹⁴。またこの頃、唐は突厥の勢力圏にあった震国（後の渤海）や室韋（北東アジアの部族）とも交渉している。中宗は七〇五年頃、使者を派遣して震国王大祚栄を招諭した。これに対し、大祚栄も次男門芸を入侍させて唐との通好を図った。室韋は景龍初年（七〇七）、朝貢して突厥討伐の援助を請願した¹⁵。この事より、唐が突厥陣営の切り崩しと北東アジアの安全確保を図っている事が分かる。

金城公主が吐蕃に降嫁（景龍四年正月）してから四カ月後の景龍四年五月、中宗は北伐令を下し、突騎施・キルギスとともに突厥可汗の牙庭の襲撃を計画した¹⁶。しかし北伐令発布の翌月の景龍四年六月、中宗自身が毒殺された為に突厥攻撃は中止となり、孤立した突騎施とキルギスは突厥軍によって各個撃破された。このため突厥包囲作戦は失敗に終わった。尚、佐藤長氏は、唐が対突厥戦の為に集結させた大軍を臨時に河

西節度使の管轄下に置き、これが節度使の起源になったと考察している⁽¹⁷⁾。筆者も佐藤氏の説に賛同する。節度使は計画的に設置されたのではなく、偶発的な事件が契機で設けられた臨時の体制が以後常態化し、それが後に唐の歴史を左右する事となる。

唐の突厥包囲作戦が失敗した後、突厥は、突騎施・キルギスを撃破した余勢を駆ってソグディアナを攻撃し、開元元年（七一三）と開元二年（七一一）には北庭を包囲攻撃した。また吐蕃も攻勢に転じ、睿宗の即位後（七二〇年の六月以降）、安西都護府を攻撃した⁽¹⁸⁾。更に吐蕃は、金城公主の降嫁から二年後の先天元年（七一二）、鄯州都督の楊矩に賄賂を贈り、公主の化粧料と称して河西九曲の地を唐より獲得した。河西九曲は肥沃で畜牧の適地であった為、軍隊の駐屯に適しており、吐蕃は同地を前進基地となして、開元二年八月、臨洮（甘肅省）を攻撃した⁽¹⁹⁾。吐蕃は、中宗の暗殺、突厥包囲作戦の失敗、その後の突厥の猛攻等を見て唐を侮り、入寇の好機と判断したようである。唐は開元二年、鄯州（甘肅省）に隴右節度使を設置して吐蕃の侵攻に備えた⁽²⁰⁾。

この様に、唐は両面作戦を回避する為に吐蕃と和し突厥への兵力集中を図ったが、中宗暗殺によって突厥包囲計画は失敗し、唐は再び突厥・吐蕃両国への対応を強いられる事となった。

第三章 唐・突厥戦の展開と終結 その後の唐による吐蕃への集中攻撃… 開元二年（七一一）～開元十八年（七三〇）

開元二年（七一一）、吐蕃が入寇を再開したが、唐は突厥とも対立していたため吐蕃と本格的に対決する事ができず吐蕃とは和戦両様で対応し

た。一方、突厥は二代目可汗默啜の横死（開元四年＝七一一）後に混乱を来たした為、唐は再び突厥に対する包囲作戦を計画した。この包囲攻撃は失敗するが、唐はその後突厥に対して軍事的圧力を加えつつ経済的な利も示し、三代目可汗比ルグを帰順へと導き、開元十五年、突厥と和睦した。これによって唐は対吐蕃戦に専念できるようになる。本章では、まず第一節で吐蕃への対応（和戦両様）と突厥への対応（包囲作戦）、第二節で突厥との和睦（開元十五年）と吐蕃への集中攻撃（開元十六年～十七年）を見る。

（1）吐蕃への和戦両様の対応と突厥への再度の包囲作戦

開元二年以降、唐・吐蕃は再び開戦したが、この時期は主として武力による解決方法をとった七世紀後半とは異なり、両国とも、戦闘と並行して和睦も含めた外交的な駆け引きを行なうなど、和戦両様で対応する様になった。

吐蕃は開元二年五月、国境を河源に劃定して新たに会盟したいと請願し、玄宗はこれを許可した。その背景として、この直前の開元二年二月、突厥が北庭を襲撃し、三月、玄宗は北伐令を發布（『文苑英華』巻四五九「命姚崇等北伐制」）して大規模な突厥攻撃を計画している。北方戦線への戦力集中を図っていた唐は、吐蕃との和平維持が必要だった為、吐蕃からの会盟の要請に応じたのであろう。しかし、八月、吐蕃軍十万が臨洮に入寇して蘭州・渭源を襲撃し、十月にも吐蕃軍が再度渭源を襲撃した為、会盟は締結されなかった。同じ十月、吐蕃は唐に対し「敵国の礼（対等の立場）」で遇するよう要請したが、玄宗はこれを拒絶した⁽²¹⁾。

その後、吐蕃は開元三年（七二五）に大食と共謀して拔汗那（フェル

ガナ)に干渉し、開元五年(七一七)には突騎施・大食と連合して安西四鎮を攻撃する等、他勢力とも連繫して効率よく攻略を進めた。²²⁾吐蕃は七世紀後半より東西交易路の掌握を目的とし、弓月(西突厥の一部族)や西突厥とも連合し外交も活用して積極的に西域に侵攻したが、その基本路線は八世紀に入っても継続された。また、吐蕃は開元四年から開元七年にかけて毎年の様に遣使して和平を請願し、玄宗が盟文に署名する事などを要請したが、玄宗はこれを拒否した。このため吐蕃は開元七年を最後に会盟の締結を要請しなくなった。開元八年以降、吐蕃軍の攻撃は激化し、侵攻地域もカシミール西北の小勃律(ギルギット)等に拡大した為、唐は軍勢派遣と軍鎮設置、西域諸王の冊立等により軍事的外交的に吐蕃の侵攻に対抗した。²³⁾

一方、突厥では開元四年六月、可汗の默啜がバヤルク遠征の帰途、伏兵に襲われて殺され、首級が玄宗に献上された。尚、則天武后、中宗、玄宗は代々詔を下し、默啜の捕縛者・殺害者に対して官職授与等の懸賞を約束し周辺諸族に圧力をかけた。バヤルク兵は褒美を期待して默啜の襲撃・殺害に及んだと思われる。默啜の横死後、甥のビルゲがクーデターを起こして可汗位を奪取し、默啜の息子や突厥を見限ったウイグル・契丹・奚等が相次いで唐に帰順した。²⁴⁾唐は攻撃の好機と判断し、開元六年二月、突厥より寝返った諸族も動員し周辺諸族を取り込んで北伐を計画した(『冊府元龜』卷九八六外臣部征討五)。玄宗は、中宗が計画した突厥包圍作戦を再度試みたと考えられる。突厥討伐軍は朔方大総管王唆の統率下に組織された蕃漢の混成軍三十万によって構成され、東の契丹・奚、西のバスマルが各々先鋒となり開元八年(七二〇)の秋を期して三代目可汗ビルゲの陣幕を攻撃する計画であった。しかし開元八年、

東の先鋒であった契丹・奚は、本国で衙官(副官)の可突于が反乱を起こしたため出撃できなかった。また西の先鋒バスマルは単独で突厥を攻撃したが、突厥軍の反撃にあって敗走した。

契丹の可突于は文武両道に優れた実力者で、玄宗からも信任されていたが、開元八年、親唐の契丹王李娑固と対立し反乱を起こした。李娑固と奚王の李大酺は、営州都督に援軍を要請した。安東都護の薛泰が可突于征伐に出撃したが、薛泰・李娑固・李大酺の連合軍は可突于に敗北して、李娑固と李大酺は戦死し、薛泰は捕虜となった。その後、玄宗が可突于を赦し、可突于の擁立した李鬱于を契丹王として承認した為、乱は終息したが、可突于の乱が勃発した為に契丹と奚は突厥攻撃に出撃できなかった。一方、西のバスマルは開元八年九月、単独で突厥を襲撃したが、突厥の反撃を被って敗走した。突厥軍は遁走するバスマルを追撃して北庭を襲撃した後、甘州と涼州も略奪した。²⁵⁾

唐軍の動向については、『新唐書』卷二五突厥伝、『資治通鑑』卷一二・開元八年十一月辛未条に、唐軍は突厥攻撃に出撃しなかったとある。更に『新唐書』卷五玄宗紀によれば、開元八年九月壬申、契丹の入寇に対して、玄宗は王唆を幽州都督に任命して河北諸道大使を節度させ、契丹を撃たせたとある。突厥攻撃の総司令官であった朔方大総管の王唆を幽州(現北京)に異動させて契丹軍の南下に備えさせた為、唐軍の突厥包圍網は崩れたと考えられる。

尚、ビルゲ可汗は唐の包圍作戦に対抗したのであろうが、開元八年(七二〇)、吐蕃との連合を画策している。チベット語編年記に、猿の年(七二〇年)、突厥の使者が吐蕃王に敬意を表しに来た。²⁶⁾とあり、ビルゲが吐蕃に遣使した事が分かる。突厥は七〇一年、吐蕃と連合して涼州を

挾撃しており、過去にも吐蕃と連繫して唐と交戦した事より推して、ビルゲが吐蕃王に対して反唐連合の締結を提案したと考えられる。

またビルゲは契丹に対して謀略をしかけ、可突于を唆し、反乱を起こさせ、契丹軍と奚軍の出撃を阻止したと筆者は推測する。詳細は別稿で論じた²⁷⁾ので、ここでは要点のみを記す。契丹・奚は神功元年(六九七)より突厥の従属下にあったが、開元四年(七二四)、默啜の横死を契機に唐に帰順した。玄宗は契丹王と奚王に各々公主を降嫁させ、官職を授与する等して懐柔する事で契丹・奚を突厥の牽制に利用した。しかし四年前まで突厥の属国だった契丹国内には親突厥派が存在し、ビルゲの謀略に応じたと思われる。また、かつて突厥遺民は唐に叛旗を翻した際(六七九)、契丹・奚を煽動して共に営州を襲撃した。更に可突于は十年後の開元十八年にも親唐の契丹王を殺して反乱を起こし、この時はビルゲに帰順して突厥から援軍を得て唐と対決している(後述)。過去においても未来においても突厥は契丹・奚を唆して唐を攻撃している事より推して、開元八年の可突于の乱も突厥の教唆によって勃発した可能性が考えられる。この様にビルゲは唐の突厥包囲作戦に対抗して、①吐蕃に反唐連合を提案し、②唐の先鋒を担う契丹に対しては謀略をしかけ出兵を阻止し、③バスマルに対しては反撃してこれを撃破した。

開元九年(七二二)、ビルゲは唐に遣使し、玄宗の子になりたいと申し出た²⁸⁾。ビルゲは唐側の再攻勢を危惧して和睦を請願したと思われる。玄宗はビルゲの要望を容れて可汗と父子関係を結び、更に絹馬貿易を通じて利益享受も説いて突厥の懐柔を図った²⁹⁾。中国皇帝が周辺諸族の君主と擬制家族関係を結んだ最初の例は、匈奴に敗北した前漢の高祖が、冒頓單于と兄弟の誼を結んで和約した事である『漢書』巻九四匈奴伝)。

漢の高祖は匈奴に屈服して止むを得ず兄弟関係を結んだが、玄宗の場合は突厥懐柔の為の外交戦略であり、名義上も父親であるため立場として突厥よりも優位であった。

玄宗は、突厥に対して懐柔策を行なう一方で警戒心を緩めず、同年、靈州(寧夏回族自治区)に朔方節度使を設置し、開元十四年(七二六)四月には幽州節度使の管轄下に新たに五つの軍鎮を増設して北辺の防備を強化した³⁰⁾。唐は軍事的外交的圧力を加えるとともに、経済的な魅力も示して突厥の懐柔を試みたのである。

こうした唐の飴と鞭が、ビルゲに唐との和睦を決断させたと思われる。開元十五年(七二七)九月、ビルゲは吐蕃の密書を玄宗に献上し、唐と突厥は和睦に至る。次節では唐・吐蕃・突厥の外交関係の転換点になった開元十五年の情勢を中心に見る。

(2) 唐・突厥の和睦と吐蕃への集中攻撃(開元十五年～十八年)

開元十五年九月丙子、吐蕃は瓜州(甘肅省)を攻撃し、瓜州城内の軍資食糧を尽く奪い取って城を破壊した。この翌月の閏九月にも、吐蕃は突騎施と連合して安西都護府を襲撃したが、この攻撃は安西副都護の趙頤貞によって撃退された³¹⁾。

吐蕃は外交を活用し、突騎施と連合して安西都護府を攻撃しているが、瓜州攻撃にあたっては突厥との連合を画策し、ビルゲ可汗に書状を送って瓜州の挾撃を提案した。しかしビルゲは吐蕃との連繫を拒絶し、九月丙戌、吐蕃の密書を唐に献上する事で玄宗に取り入った。玄宗は突厥が吐蕃と決別した事を喜び、ビルゲに褒美として、朔方節度使の管轄下にある西受降城(内蒙古自治区)で互市する事を許可し、毎年縑帛数十万

匹を突厥の馬と交換した。西受降城は、中宗時代に築かれた対突厥防衛の要塞・三受降城の中で最も北にある城塞である。三受降城の構築後、これが防波堤になって突厥は漠南に入寇できなくなっていた。開元十五年九月以降、西受降城は、国境警護と交易拠点兼ねる事になった。突厥との絹馬貿易によつて、唐も壮健な軍馬を確保できる様になった³²。これ以後、突厥は毎年の様に朝貢し、両国は良好な親善関係を構築する。先述の様に、ビルゲ可汗は開元八年、おそらくは孤立状態を打開する為に吐蕃に遣使して連合を画策したと思われる。開元十五年には吐蕃の方から連合を提案したが、ビルゲは何故これを拒み、唐との和睦を選択したのであろうか。

ビルゲが唐と和睦した理由として、以下の三点が考えられる。①唐の辺防強化によつて軍事的に追い詰められた。②諸族と連繫した唐が突厥包囲作戦を計画したため外交的に孤立を深めた。③唐との絹馬交易が魅力的だった。尚、①②と関連する事であるが、開元十五年九月、涼州都督王君奐が突厥に向かう吐蕃の密使を攻撃している。河西節度使による防御体制・監視体制が堅固だった為に、突厥・吐蕃間の連絡が難しくなった可能性がある。ビルゲは吐蕃との連合は困難と判断し、唐との和睦を選んだと思われる。

玄宗は、突厥に絹馬貿易の特権を与えて優遇する事でビルゲを惹き付け、以後も唐の同盟者として維持しようと画策したのであろう。

唐は、この翌年の開元十六年（七二八）から十七年（七二九）にかけて吐蕃に対して多方面から波状攻撃を加え、すべての戦いで勝利を収めた。即ち、開元十六年正月、安西副都護の趙頤貞が吐蕃軍を曲子城で撃破した。七月には、再度瓜州に襲来した吐蕃軍を瓜州都督の張守珪が空

城の計を用いて撃退し、河西節度使の蕭崇と隴右節度使の張忠亮が青海西の渴波谷で吐蕃軍を大破した。八月には杜賓客が祁連城で吐蕃軍を撃破した。また蕭崇は、將軍タグラコンロエ（悉諾邏恭祿）が唐と通謀しているとの偽情報で吐蕃本国に流し、開元十五年九月の瓜州襲撃を成功に導いた、この名將を吐蕃王に肅清させた。開元十七年三月には、瓜州都督の張守珪と沙州刺史の賈師順が吐蕃の大同軍（沙州西南）を撃破し、朔方節度使の信安王禕は青海東南の石堡城（吐蕃軍の軍事拠点）を奪取した³³。この様に唐軍は河西・隴右でいずれも勝利し、謀略にも成功して手ごわい敵將も葬った。

連敗した吐蕃は開元十八年（七三〇）、遣使して和睦を請願した。このため唐・吐蕃間の戦闘は止み、開元十八年から二十一年（七三三）にかけて双方の使節が和平と会盟の交渉の為に長安とラサを往復した³⁴。この様に、唐は開元十五年に突厥と和した事で北辺防備を憂慮する必要がなくなり、西方に兵力集中して開元十八年、吐蕃を屈服させた。これによつて対吐蕃戦は終息へと向かったのである。

第四章 唐と北方連合（突厥・契丹・奚・渤海）との戦争および唐の対吐蕃融和策（開元会盟と赤嶺碑文）…開元十八年～二十一年

開元十八年以降、吐蕃との和睦により西方戦線は終息へと向かったが、唐と吐蕃が和平交渉を行っていたのと同じ時期（開元十八年～二十一年）、東の契丹で、衙官の可突于が再度の反乱を起こして親唐の契丹王を誅殺し（開元十八年）、突厥・渤海と連繫して北方アジアを戦場に唐軍と対戦している（開元二十年～二十一年）。

本章では、これら北方情勢と西方情勢の相関を意識しつつ、開元十八年から開元二十一年までの東部ユーラシア情勢を見る。第一節で北方と東方の情勢、第二節で開元会盟と赤嶺碑文を取り上げる。

この時期の北方アジア情勢に関しては古畑徹氏、唐・吐蕃の会盟については佐藤長氏の優れた先行研究がある³⁵⁾。古畑氏は、開元二十年前後の唐・渤海紛争と唐・契丹紛争（可突于の乱）が連動している事、この時期の東アジア・北アジア情勢が渤海・契丹・突厥連合と唐・新羅連合の対立構造であった事を初めて指摘した。また佐藤氏は、年代や記述の異なる諸史料を検討して赤嶺碑文の建てられた時期等を考証し、唐・吐蕃が和睦に至った背景について考察した。尚、先行研究では、突厥については踏み込んで論じておらず、北方と西方の相関についても十分に論考されていない。筆者は突厥の動向や唐・突厥間の外交交渉も取り上げ、個別の地域に捉われず、大きな視点で東部ユーラシア情勢を俯瞰し、北方情勢と西方情勢の相関について考察したい。特に、開元二十年から二

十三年の国際情勢は非常に複雑であり、四年という短期間に情勢が目まぐるしく変化するので、図2の【図A】～【図D】を参照しながら読み進めて頂きたい。本章に対応する図は【図A】と【図B】である。

(1) 開元十八年～開元二十一年の北方と東方の情勢

開元十八年五月、契丹の衙官可突于是、親唐の契丹王李邵固を弑殺して屈辱を推戴すると、奚を脅して、突厥に帰順した。第三章第一節で述べた様に、可突于是開元八年、反乱を起こしたが、玄宗に赦されたため臣従したが、開元十八年、可突于是李邵固と対立した事に加えて唐からも冷遇された為、不満を爆発させて再び叛旗を翻したのであった³⁶⁾。

可突于是、突厥の支援を期待してビルゲ可汗に帰順した。しかし、ビルゲが契丹に派兵するのは開元二十年に入ってからであった。開元十九年、ビルゲの弟キョル・テギンが死去した時、玄宗はビルゲの要請に応

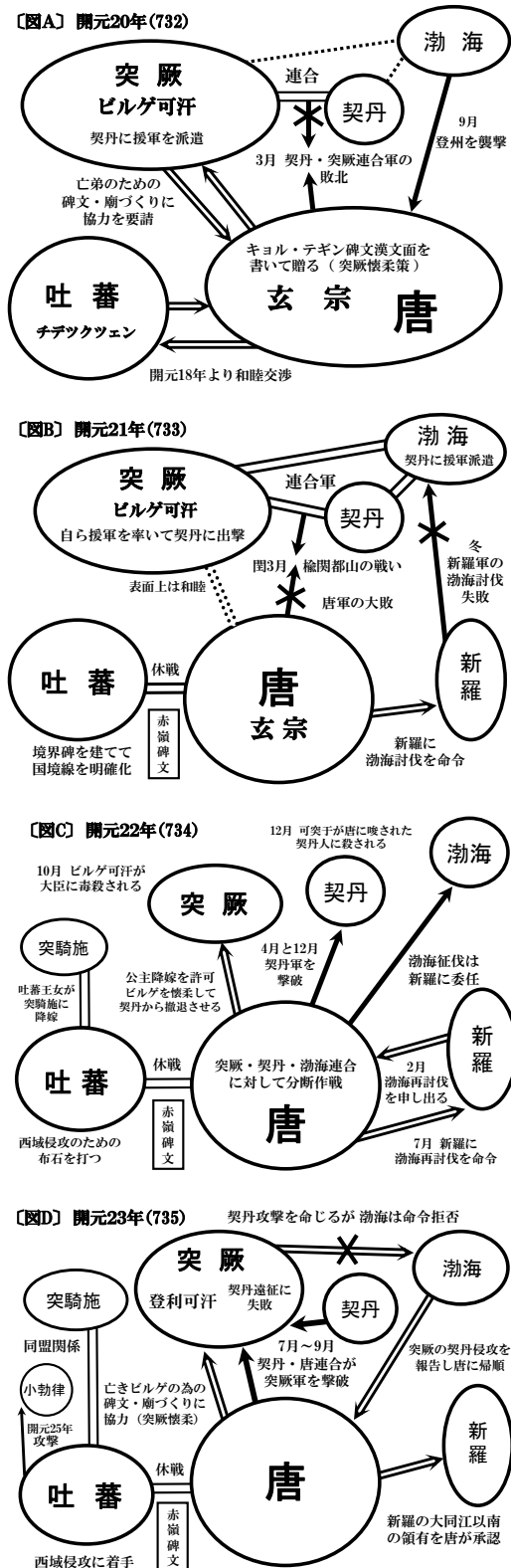


図2: 開元20～23年における外交関係の推移。
黒矢印は敵対行為、白は友好を表す。わずか4年間に外交関係が目まぐるしく変化している。

じて職人を派遣し、テギンの為の碑文・廟づくりに協力した。同年十一月、ビルゲも使者を派遣して玄宗に感謝し³⁷⁾、両国の親睦は深まった。しかしこの翌年の開元二十年、ビルゲが契丹に援軍を派遣した事より推察すると、弟が死去した為に開元二十年まで軍事行動を控えたと思われる。対する玄宗も、契丹や渤海に対して強い影響力を持つ突厥と親善関係を保持する事は、北方アジアの安全保障を確保する為にも必要であると判断し、ビルゲの懷柔を画策したと考えられる³⁸⁾。

開元二十年、ビルゲは可突于に援軍を派遣し、玄宗は同年正月、朔方節度使信安王禕に契丹討伐を命じて応戦した。信安王は開元十七年二月、吐蕃の手から石堡城を奪取した名将である。唐は開元十八年より吐蕃と和睦交渉し、西方での戦闘がなくなった為、玄宗は西方戦線を縮小し、北方の軍事力を強化したと思われる。事実、西方戦線の將軍を北方戦線へと異動している。開元二十年三月、可突于率いる契丹軍・奚軍と突厥の援軍は、幽州の北山で唐軍と交戦したが、戦いは契丹・突厥連合軍の敗北に終わり、奚軍は唐に降伏した。可突于は北に遁走し、ビルゲに対して再度の援軍派遣を要請した³⁹⁾。

この敗戦の六ヵ月後の開元二十年九月、渤海軍が唐領内の登州（山東省）を襲撃し、刺史を殺害した。渤海は、契丹の反乱（六九六～六九七年）を契機に建国した関係から、建国当初より契丹・突厥と通好した。その後、玄宗が先天二年（七一二）に初代の大祚榮を渤海郡王に封じて懷柔を試みたが、二代目の大武芸は、唐が北隣の黒水靺鞨を羈縻州となし、弟の門芸を寵遇する様になった為、唐への反発心と危機感を募らせた⁴⁰⁾。古畑徹氏は、渤海の登州襲撃は可突于の乱と連動した軍事行動であったと考察している。即ち、契丹軍が敗北した事によって渤海への進

撃路が開かれたので、武芸は唐軍の襲来を恐れ、先手を打って唐軍の出港地となる登州を攻撃したと考察している⁴¹⁾。

玄宗は、渤海の登州襲撃事件を重く見て、開元二十一年正月、長安に滞在中であった新羅の侍子金思蘭に対して、帰国し新羅軍を率いて渤海を征伐するよう命令した⁴²⁾。唐は突厥・契丹対策に専念しなければならず、渤海対策にまで手が廻らなかった為、新羅に渤海の牽制を任せただであらう。

一方、突厥のビルゲ可汗は開元二十一年、自ら援軍を率いて可突于の支援に出撃し、渤海軍も契丹に加勢した。ビルゲは前年の雪辱戦を期して出馬し、渤海は契丹支援が自国の防衛に繋がると判断して派兵したと考えられる。開元二十二年閏三月、榆関都山（河北省）において、契丹・渤海・突厥連合軍と唐軍は対戦した。唐軍には、前年降伏した奚軍も参戦した。しかし、唐軍は契丹・渤海・突厥連合軍の猛攻に圧され、奚軍も日和見を決めて支援しなかった為に不利となり敗北した。唐はこの敗戦により、幽州道副総管の郭英傑と呉克勤が戦死し、烏知義と羅守忠が逃走して、六千餘人（『旧唐書』卷一九九契丹伝）とも万人（『新唐書』卷二一九契丹伝）とも言われる将兵が戦死した。勝利した突厥陣営においてもビルゲの息子が戦死しており、戦いが激烈だった事が窺える。尚、ビルゲは、突厥碑文（ビルゲ可汗碑文南面八行目～九行目）において、この戦闘を記し、郭將軍（郭英傑）を討ち取り、三万の唐軍を斃したと述べて戦勝を誇っている⁴³⁾。

ここでビルゲが契丹に派兵した理由を考えてみたい。開元十五年以降の唐は、吐蕃を牽制する為にも突厥と和平を維持する必要があり、突厥に対して宥和策で臨んだ。唐の外交戦略は成功を収め、西方への軍事力

の集中によって吐蕃を屈服させるに至ったが、北方に対する唐の警戒心は希薄になった。ビルゲはこれを好機と捉え、可突于と連繋して北東アジアへの勢力拡大を企てたと思われる。ビルゲは唐との和睦によって政權の安定を図ったが、領土の拡張や覇權の確立を断念した訳ではなかった。契丹・奚はかつて突厥の属国であり、ビルゲは開元六年と開元九年に契丹遠征、開元十年に奚遠征を行なうて再征服を試みている⁽⁴⁴⁾。開元二十年と二十一年の契丹への派兵は、ビルゲ自身の領土的野心も原動力になったのであろう。

次に、新羅の動向を見る。新羅は、開元二十一年七月、帰国した金思蘭より玄宗の下した渤海征伐命令を受け取った。同年冬、新羅は勅命に従って渤海に出撃したが、丈餘の大雪に行く手を阻まれ、山路も阻隘だった為に過半数の兵士を喪失して戦果のないまま撤退した。しかし、翌年の開元二十二年二月、新羅は玄宗に上表して、自ら渤海の再討伐を願った⁽⁴⁵⁾。

新羅は、六七一年から六七六年にかけて朝鮮半島の支配權を巡って唐と対決した(唐・新羅戦争)が、六七八年に唐軍が吐蕃との戦いに大敗した為もあり、唐は新羅征伐を断念した⁽⁴⁶⁾。古畑徹氏は、その後も吐蕃・突厥への対応が唐の関心事となった為、六九〇年代より唐は新羅に対する強硬姿勢を次第に緩和していったと考察している⁽⁴⁷⁾。新羅は八世紀初頭より渤海を警戒し、開元九年(七二二)には北に長城を構築しており⁽⁴⁸⁾、唐との関係改善と渤海への国防強化を目的として、唐の出撃命令に応じたと思われる。

(2) 開元会盟と赤嶺碑文

吐蕃は、唐に対する敗戦を受けて、開元十八年より遣使して和睦を請

願した。玄宗もラサに使節を派遣し、吐蕃王と金城公主に拝謁させた。開元十九年、吐蕃が互市を請願した時には、玄宗は青海東南にある日月山の赤嶺において互市する事を許可した⁽⁴⁹⁾。

開元二十一年正月にラサを訪問した李嵩に対し、同年二月、金城公主が「今年九月一日に赤嶺に碑を建て、唐・吐蕃間の国境線を定めてほしい」と請願した事が境界碑の立石の契機になった。玄宗は公主の提案に応じ、赤嶺に国境劃定の為の碑文を建てた⁽⁵⁰⁾。

赤嶺を国境線に定めた理由は、以下の三点であろう。①唐は開元十七年、赤嶺の東二十里に位置する吐蕃の軍事拠点・石堡城を奪取しており、勝利したところで境界を線引きしたと思われる。②赤嶺は開元十九年、玄宗が互市の場として許可しており、両国にとっては交易の接点でもあった。③同地は農耕地帯と遊牧地帯を分ける境界線でもあった⁽⁵¹⁾。自然・地理の上からも唐と吐蕃の境界として適切な場所であった。

玄宗は赤嶺に碑を建て、碑石の上には開元会盟の盟文も刻ませ、盟約内容と境界線を明確にした。神龍会盟の際にも黄河を境とする取り決めは行なわれたが、その後、吐蕃の越境行為(黄河への架橋と河の東側での築城)等によって国境線が遵守されなかったため、今回は国境地点に目印として碑を建て、盟約を違えないよう盟文も刻んだと考えられる。盟文は『冊府元龜』卷九七九外臣部和親二に記されており、唐・吐蕃間の甥舅関係の確認と強調、国境侵犯の禁止等、和睦の条件と理念が謳われている。

赤嶺碑文を立石する当日、玄宗は張守珪・李行禕・吐蕃の莽布支を現地に派遣して建碑を監督させた。張守珪は開元十六年七月と開元十七年三月に吐蕃軍を撃破して対吐蕃戦を優勢に導いた名将であり、この当時

は鄯州都督・隴右節度使であった。李行禕は開元二十年、使節としてラサに赴いている⁵²。玄宗は、対吐蕃の軍事・外交に経験の豊富な二人を唐側の監督者として選抜したのである。また唐・吐蕃双方の使節達がこれまで両国の最前線であった河西・磧西・劍南に赴き、両国は和親したので以後は侵犯してはならないと通告して住民達を諭した。建碑後、玄宗は張守珪を召還し、契丹討伐の司令官に任命した。西方戦線が終息したので、玄宗は対吐蕃戦で殊勲を上げた將軍を対契丹戦に投入し、北方アジア情勢の沈静化を図ったと思われる。

(3) 開元十八年から二十一年にかけての唐の外交政策

以上で見てきたように、この時期の唐は、吐蕃とは和し、突厥に対しでは和戦両様で対応しているが、吐蕃との会盟の外交的背景として、北方アジア情勢が深く関わっていると考えられる。事実、開元十八年から唐と吐蕃は和平交渉を開始しているが、同じ開元十八年より契丹の可突干が再度の乱を起こして突厥に帰順し、北方情勢が緊迫化している。唐は北方情勢の悪化を憂慮して、開元十八年以降、吐蕃との休戦交渉を進め、西方戦線の將軍達(信安王瑋・張守珪)を対契丹戦へ異動させる等して北方への応戦体制を整えた。即ち、唐にとって北方との戦争と西方との和平交渉は連動していたと言える。

尚、突厥が開元二十年と二十一年、契丹に援軍を派遣した時には、唐はこれに応戦して幽州北山と榆関都山で突厥軍と交戦したが、突厥本国(モンゴリア)への出兵等の突厥との本格的な軍事対決はなかった。唐はあくまで表面上は突厥に対して和平で臨み、契丹の帰属をめぐって交戦する事があっても和睦交渉の道を残していた。

そして、この唐・突厥の二大勢力の対立構造の中に、東方・北方の周辺諸国(新羅・渤海)は巻き込まれていった。反唐であった渤海は、利害の一致する突厥・契丹と連合して唐と対立し、唐との関係改善を希望していた新羅は、渤海の牽制役を引き受ける事で唐に取り入った。

第五章 北方情勢の沈静化と西方情勢の悪化…開元二十二年(七三四)～二十六年(七三八)

唐は、開元二十二年より契丹・渤海・突厥に対して分断作戦を行って類勢挽回を画策した。本章では、第一節で北方アジアに対する唐の対応策、第二節で緊迫化する西方情勢を取り上げる。尚、本章には【図C】【図D】が対応する。

(1) 北方アジア情勢の沈静化

唐は、まず契丹に対して増強した唐軍を組織して派遣した。即ち、玄宗は対吐蕃戦で実績のあった張守珪を召還して契丹征伐の司令官に任命し、対契丹戦に投入した。渤海と突厥に対しては、唐は外交戦略で臨んで撤退を促し、契丹の孤立化を図った。

渤海対策については、玄宗は引き続き新羅に征伐を委任した。開元二十一年冬に新羅が行なった渤海征伐は失敗したが、開元二十二年二月、新羅が渤海の再討伐を願ひ出たので、玄宗は開元二十二年七月、新羅に対して再度の渤海討伐を命じた⁵³。

突厥に対しては、玄宗は懷柔策をしかけ、ビルゲ可汗に対して公主の降嫁を許可した。ビルゲは以前から公主の降嫁を望んでいたが、玄宗は

突厥の強大化を恐れ、これを拒絶していた。玄宗は、長年の希望を叶える事でビルゲを手なづけ、契丹から撤退させようとしたのであろう。ビルゲは喜び、開元二十二年四月、遣使して玄宗に感謝した⁽⁵⁴⁾。

開元二十二年四月、張守珪は契丹軍を撃破し、六月には、玄宗に契丹人捕虜を献上した⁽⁵⁵⁾。この戦いには、突厥軍も渤海軍も参戦していない⁽⁵⁶⁾。渤海は、新羅軍の動向を危惧して契丹から撤退したと思われる。

ビルゲ可汗の撤退理由としては、以下の四点が考えられる。①年来の希望であつた公主の降嫁が許可され、唐との友好関係が樹立しつつあつた。②新羅が明確に唐側に付き、北方勢力との対決姿勢を示した。③渤海が、新羅の牽制により、契丹に加勢する事が困難になつた。④吐蕃と唐が休戦した為、北方戦線への唐軍の増強が予測された。

新羅と吐蕃が唐陣営に与した為、突厥は東・西・南から包囲され、外交的に孤立する事になつた。ビルゲは一旦撤退し、態勢を立て直しを図つたと考えられる。契丹軍を孤立させて撃破するという唐の外交戦略は、成功を収めたと言えよう。

しかし、開元二十二年十月、ビルゲが大臣の梅録唆によつて毒殺された⁽⁵⁷⁾為、公主の降嫁は実現しなかつた。十二月、ビルゲの死を知つた玄宗は、その死を悼み、宗正卿の李倕を突厥に派遣して弔問させ、亡き可汗の為の碑文・廟づくりを協力させた。また玄宗は、ビルゲの息子登利と父子関係を結び⁽⁵⁸⁾、突厥との友好関係を継続した。

一方、契丹情勢であるが、張守珪が開元二十二年の十二月にも契丹軍を撃破したので、連敗した可突于は降伏した。しかし可突于が突厥軍を呼び寄せて再び叛こうと企てた為、張守珪の部下王悔は、李過折（可突于と共に兵馬の権を掌握）に命じて、可突于と、可突于の推戴する屈烈

を誅殺させた。李過折は玄宗から北平郡王・檢校松漠都督に冊立されたが、その後、可突于の余党泥禮によつて殺害された。だが玄宗は泥禮を処罰せず、松漠都督に任じて契丹の支配を委任した⁽⁵⁹⁾。本来ならば唐の認めた都督を殺害した人物を赦すはずはないが、これにより唐が名分よりも外交戦略を重視している事が分かる。

契丹および奚はこうして唐に帰順したが、突厥の新可汗登利は契丹と奚が唐に寝返つた事に怒り、開元二十三年（七三五）、契丹に侵攻した。ビルゲ可汗の暗殺の翌年という不安定な時期に、あえて登利が親征を決行した事より推測して、突厥にとつて契丹への懲罰が威信をかけた戦いであつた事が窺える。しかし、この遠征は開戦前から突厥にとつて不利な様相を呈していた。登利は出陣前、渤海王大武芸に対して契丹への出撃を命令したが、武芸は出兵を拒絶し、開元二十三年三月、唐に遣使して突厥の契丹侵攻を報告し、帰順を図つた⁽⁶⁰⁾。亡きビルゲを弔問する為に突厥を訪問していた李倕や降人も突厥軍の東征を報告しており、登利の契丹遠征は早い時期から唐側に察知された⁽⁶¹⁾。玄宗は、契丹の泥禮、奚の李帰国、幽州節度使の張守珪らに勅書を下し、協力して突厥軍を迎撃するよう命じ、応戦準備を整えて突厥軍を待ち受けた。開元二十三年の七月から九月にかけて突厥軍は契丹・奚・唐連合軍に敗北し、甚大な痛手を受けて撤退した⁽⁶²⁾。

しかし、玄宗は突厥軍を深追いしなかつた。その理由は西方情勢の悪化にあると推測する。開元二十二年、吐蕃は王女を突騎施に嫁がせた⁽⁶³⁾。吐蕃は過去に少なくとも二度（開元五年と開元十五年）突騎施と連合して安西都護府を襲撃している為、玄宗は吐蕃・突騎施連合を危険視し、吐蕃王チデツクツェンに勅書を下して突騎施との連繫を非難した⁽⁶⁴⁾。開

元二十三年十月には、突騎施が北庭と安西都護府を襲撃した。開元二十四年（七三六）正月、北庭都護の蓋嘉運は突騎施を撃退した⁽⁶⁵⁾が、西方戦線の緊迫化は唐にとって看過できない事態であった。

玄宗は、登利に下した勅書で対突騎施戦への共闘を呼びかけている⁽⁶⁶⁾。吐蕃・突騎施連合を牽制する為にも唐には突厥と連繫する必要がある、北方アジアでの突厥の背信行為には目をつぶる事にしたと考えられる。一方の登利も、契丹遠征の失敗によって国力と威信を損ねた為、以後は唐との絹馬交易を活発化する事で国力の回復を図った⁽⁶⁷⁾。

渤海は、唐・新羅連合による軍事的・外交的圧迫に加え、契丹の唐への帰順によって孤立を深めた為、唐と和睦する道を選択した。開元二十三年三月、大武艺は唐に遣使して謝罪し、突厥の契丹侵攻を報告して唐への帰順を図った。武艺は、かつてビルゲ可汗が吐蕃の密書を献上する事によって玄宗の歓心を買ひ、和睦に成功した例に倣ったと思われる。武艺は、開元二十四年三月にも弟の蕃を唐に入貢させて唐に恭順の意を示した⁽⁶⁸⁾。

渤海の帰順と前後して、唐は渤海の牽制役を担っていた新羅に対して褒賞を与えている。即ち、開元二十三年、新羅に帰国する金義忠に対して、玄宗は大同江以南の領有を正式に許可した。新羅はその少し前から玄宗に対し、対渤海戦の為の防衛ラインを構築する為に大同江以南を領有し、国境防備の為の駐屯軍を大同江以南に設置したいと請願していた⁽⁶⁹⁾が、それらの要望を唐は認めたのである。

尚、この二年前の開元二十二年に唐は吐蕃との国境線を劃定しており、これと新羅に対する大同江以南の領有の正式な承認は、この時期の唐の対外戦略が太宗・高宗の頃から大きく変化した事を示唆している。即ち、

周辺地域への比較的強い支配から、親唐諸国の領土を承認し柔軟な姿勢で勢力圏の拡大と安定化を図るなど、唐を中心とする国際秩序の構築へと対外的な姿勢が変化してきた。そして新羅は、唐による領土承認が外交手段として有効に作用した例と言える。

新羅は開元二十四年六月、謝恩の使者を唐に派遣した⁽⁷⁰⁾。この後、新羅は国境防衛の為に大同江以南に軍鎮を設置し、対渤海を見据えた北辺防備を固めていく。七世紀後半、外交を巧みに利用し、唐と連合して百濟・高句麗を滅ぼした新羅は、今回もまた外交を有効に活用して唐との関係改善を果たし、領土承認と軍鎮設置を唐に認めさせた。玄宗も新羅を親唐政権となし、渤海の牽制に利用する事で北東アジアと朝鮮半島の安全保障の確立を意図したと思われる。こうして唐と良好な親睦関係を結んだ新羅は、もはや日本の支援を必要としなくなり、七十九年の遣使を最後に日本への遣使を停止する。その一方で、渤海が日本への遣使を開始した（七二七年）。この当時の渤海は唐・新羅・黒水靺鞨と対立していたので、日本に新羅・黒水靺鞨の牽制を期待して通好を開始したのであるが、対する日本も孤立化を憂慮していた関係上、渤海との使節交換に積極的で、以後、両国は渤海が滅亡するまで二百年にわたり使節交換を続ける事となる⁽⁷¹⁾。

開元二十二年から二十三年にかけて、この様に契丹・渤海・突厥が帰順して北方アジア情勢は沈静化へと向かった。しかし唐が北方情勢に専念している間に、西方では吐蕃が覇権の確立に向けて西域侵攻の準備を進めていた。

（2）吐蕃との戦争再開と吐蕃包囲網の形成

吐蕃は開元十八年以降、毎年唐に遣使しており、突厥・契丹・渤海連合と唐軍の対戦情報も把握していたと思われる。開元会盟によって唐とは休戦状態にあり、唐の攻撃を懸念する必要がなかった事も吐蕃には幸いした。吐蕃は開元二十二年、突騎施と通婚して西域侵攻の為の布石を打った。玄宗は吐蕃・突騎施の婚姻同盟を察知していたが、開元二十三年七月から九月に突厥が契丹に侵攻し、北方情勢が依然として不穏であった為、吐蕃王に勅書を下して婚姻同盟を非難するだけに留めた。

開元二十五年（七三七）、吐蕃はカシミールの小勃律を攻撃し、本格的に西域への進撃を開始した。開元会盟によって国境である赤嶺の侵犯が禁じられ、青海方面からの西域侵攻が禁止された為、吐蕃はパミール經由の侵攻路の開拓を図ったと考えられる。小勃律は、吐蕃にとってパミール經由で西域に侵攻する際、関門に相当した。かつて吐蕃は、開元十年（七二二）、道を借りて安西四鎮を攻撃したいと称して同地に侵攻し、小勃律王は北庭節度使に救援を要請して吐蕃軍を撃退した経緯もあって、この地の安全保障に関しては唐側も配慮していた。即ち、吐蕃に小勃律を奪われると西域諸国が吐蕃軍の脅威に曝される為、玄宗は葱嶺守捉や綏遠軍を設置し、小勃律王を冊立する等して同地の掌握につとめた。しかし吐蕃は小勃律經由での西域侵攻ルートの確保を断念せず、開元二十五年、小勃律を再攻撃した。開元二十三年から二十四年にかけて唐と突騎施が交戦していたので、吐蕃は侵攻の好機と捉えたのである⁷²。

玄宗は吐蕃に対し、小勃律からの撤退を勧告したが、吐蕃がこれを無視して小勃律を攻め破った為、開元二十五年二月、唐軍は青海の吐蕃軍を攻撃した。玄宗は吐蕃と突騎施の同盟を警戒していたが、小勃律からの撤兵を拒否した事で吐蕃の西域侵攻は確実であると判断したのである。

突厥・渤海の帰順によって北方アジア情勢も安定化し、対吐蕃戦への戦力の集中も可能になったので、国際情勢の上から見ても唐には吐蕃との休戦を続ける必要性がなくなっていた。開元二十六年（七三八）三月、吐蕃が河西を襲撃して唐に応酬し、六月には唐が河西・隴右・劍南から吐蕃に対して一斉に攻撃を開始した⁷³。三方面からの一斉攻撃を始めるに当たって、玄宗は赤嶺碑文を倒し吐蕃との盟約を破棄した。開元二十七年（七三九）には金城公主も死去し、唐と吐蕃を結ぶ絆も切れた。

吐蕃と戦闘を再開する一方で、唐が吐蕃牽制の為に新たに利用したのが南詔であった。当時の南詔王は四代目の皮邏閣であったが、唐が吐蕃への一斉攻撃を開始した開元二十六年初め、玄宗は皮邏閣を越国公に封じて蒙帰義の名を下賜し、九月には雲南王に冊立した⁷⁴。この頃、吐蕃は嶲州（四川省）の塩井を狙って南下を開始しており、玄宗は蒙帰義と嶲州都督の許寄物に勅書を下し、互いに協力して吐蕃軍を撃退するように命じている⁷⁵。玄宗は、蒙帰義が劍南節度使と嶲州都督に加勢する事、外交的にも南詔が東南より吐蕃を牽制する事を期待したと思われる。また玄宗は開元二十六年十月にソグディアナの康国（サマルカンド）・曹国（カブーダン）・史国（キシム）、インド西北の罽賓国（カピシ）の王達を各々冊立し、中央アジアの諸王を懐柔して西方より吐蕃の牽制を画策している⁷⁶。開元二十八年（七四〇）には突厥の登利可汗も冊立している⁷⁷が、これも吐蕃への牽制という外交戦略が背後にあったかも知れない。唐は、北方・南方・西方の周辺諸国を懐柔する事で吐蕃包囲網の形成を図ったと考えられる。

（3）開元二十二年から二十六年にかけての唐の外交戦略

以上で論じてきたように、開元二十二年から二十三年にかけての唐は北方情勢に対応する為に吐蕃・新羅に対して宥和策で臨み、軍事・外交を巧みに活用して契丹・渤海・突厥を帰順させた。しかし唐が北方情勢に専念している間に吐蕃が西域への侵攻を開始した為、北方情勢の安定後、唐は開元会盟を破棄し、吐蕃と本格的に戦争を再開した。それと同時に、唐は突厥・南詔・中央アジア諸王を冊立し懐柔して親唐的な勢力圏を築きつつ吐蕃包囲網を作り、外交的にも吐蕃の孤立化を画策した。

おわりに

七世紀、唐は主として武力によって周辺諸国を次々と滅ぼし支配領域を拡げていったが、六七〇年以降の対吐蕃戦での四度の大敗と突厥の再興により、西方と北方に大きな勢力を残した形で周辺諸国の勢力も安定化してしまった。この状況を受けて、七世紀末から八世紀初頭にかけて周辺諸国への唐の対応策は大きく変化し、武力を行使するだけでなく外交戦略を巧みに用いるなどより柔軟に対応するようになった。

対する周辺諸国の唐への対応策も変化していった。多くの周辺諸国にとって独立期とも言える七世紀後半は、周辺諸族には唐と戦う以外に主たる選択肢がなかったが、八世紀以降、周辺諸国家が安定期に入ると、国家としての存続と繁栄が重要課題となり、その為にも周辺諸国は外交を一層重要視した。即ち、時には隣接する勢力と連合を組み、或いは逆に、唐に誼を通じ唐の承認を得る事で、国家の安定と存続を図るようになった。

唐もまた周辺諸国家の存立を認め、諸国同士が連繋して唐に敵対する

事のないよう、諸国間に楔を打ち込みつつ、擬似的な同盟国として自分の勢力圏に取り込もうとした。唐は冊立や官職授与、公主の降嫁、擬制家族関係の締結等の多彩な外交手段を活用して周辺諸国を懐柔した。また交易を許可して経済圏に取り込む事で、唐との和睦が有益である事を示した。勿論、外交の成功は軍事力の裏付けがあつて初めて意味をなすものであり、辺防組織としての節度使の相次ぐ設置は外交戦略と補完しあつて諸国の統御を可能にしたと考えられる。その結果、例えば突厥や渤海は密書献上等によって唐に取り入り、新羅は渤海征伐を請け負った功により唐から領土の承認を得て存立を認められ、唐の勢力圏に入った。

唐と周辺諸国の動的な拮抗状態は、安史の乱まで数十年続いたが、唐が内側から崩壊する形で両者の均衡は崩れる。安史の乱の時、唐はウイグルに援軍を要請し、その後吐蕃に長安を占領された。唐は周辺国家と同じレベルの一国へと凋落し、強力な主導権を取れず、拒絶していた「敵国の礼」を吐蕃に対して認める様になる。しかし、安史の乱以後の唐は、弱体化した軍事力を外交で補う事によって、強大化した周辺諸国に対抗する様になった。例えば、徳宗はウイグルや南詔と結んで吐蕃の牽制を試み、ある程度は成功を収めている。

八世紀前半の唐の外交政策は、後の澶淵の盟にも影響を与えていると筆者は推測している。澶淵の盟で決まった主な条項は、北宋と遼が兄弟の誼を結ぶ事、毎年絹二十万匹と銀十万両を遼に贈る事、国境線の劃定、国境侵犯の禁止、国境の城塞・河道の新築開拔の禁止、捕虜の送還等であつた。これらの主条項に加えて、北宋は遼に対して国境地帯の権場において交易する事を許可し、両国の交わした盟約を碑文に刻んで建てた

唐は、吐蕃と二度会盟（神龍会盟・開元会盟）して各々国境を劃定し、開元二十一年には盟約を赤嶺碑文に刻んで建てた。また唐は、開元九年、突厥と父子關係を結び、開元十五年には突厥に対して国境地帯（西受降城）での互市を許可し、毎年絹數十万匹を突厥の馬と交換した。会盟の締結、国境の劃定、盟文を記した碑の立石、擬制家族關係の締結、国境地帯での交易の許可は、八世紀前半、唐が吐蕃および突厥に対して行った外交戦略であつた。擬制家族關係の締結と歲幣の下賜については、その淵源を前漢の高祖が匈奴との間で取り決めた和平協定にまで遡る事ができるが、唐は前漢の外交政策を繼承し、更に多様な形に發展させたと考えられる。

瀟淵の盟の起源については、毛利英介氏が遼と後唐の間で締結された雲中会盟をその原型であると考察したが、筆者は更に時代を遡り、八世紀前半に完成された唐の外交政策が雛型であつたと推察する。即ち、会盟の締結・国境劃定・盟文を刻んだ碑の立石は吐蕃との、擬制家族關係の締結・国境での交易の許可は突厥との和睦がモデルであつた。この後、唐と吐蕃は建中会盟（七八三）と長慶会盟（八二二）で国境を劃定したが、更に加えて、建中会盟では緩衝地帯での耕作・城塞の増設・兵力増強の禁止、長慶会盟では国境地帯での不審者の扱いに関しても取り決めた。また徳宗は、興元元年（七八四）の奉天盟書で、吐蕃に毎年絹一万段の下賜を約している⁷⁹。この様に、唐の様々な時代の外交事例が複合し、五代そして北宋へと繼承されていったと思われる。

註

（１）菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシ

ア諸国の自立への動き―新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性」『史窓』六六号、二〇〇九。

（２）佐藤長『古代チベット史研究』上（東洋史研究会、一九五八）、護雅夫「突厥と隋唐両王朝」『古代トルコ民族史研究』（山川出版社、一九六七）、森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集・史学科篇』四号、一九八四）、古畑徹「唐渤海紛争の展開と国際情勢」『集刊東洋学』五五号、一九八六）、金子修一「隋唐の国際秩序と東アジア」（名著刊行会、二〇〇二）。

（３）『旧唐書』卷一九四突厥伝、『新唐書』卷二二五突厥伝、『冊府元龜』卷九九九外臣部請求・開元十九年十一月。小野川秀美「突厥碑文訳註」『滿蒙史論叢』四卷、一九四三）、拙稿（竹中愛語「唐玄宗「御製御書」碑文の刻字」『史窓』四七号、一九九〇）、森安孝夫・オチル責任編集『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』（朋友書店、一九九九）、大澤孝「近年におけるビルゲ可汗遺跡の発掘調査と亀石・碑文の方位から見た対唐關係」『史朋』三九号、二〇〇七）等を参照。

（４）『旧唐書』卷八玄宗紀、卷一九六吐蕃伝、『新唐書』卷二六吐蕃伝、『冊府元龜』卷九九九外臣部和親・開元二十一年二月。尚、開元会盟が行なわれた時期については史書に記載がない。筆者は、開元十八年から二十一年に和睦と会盟の為の交渉が行われたと考える。また、赤嶺碑文の建てられた時期等は史料によつて記述が異なるが、佐藤長氏は（２）論文四六六～四六七頁において、碑は開元二十一年に建てられたと考証した。建碑の時期については、筆者は佐藤氏の説に従う。開元会盟と赤嶺碑文についての考察の詳細は、「唐・吐蕃会盟の歴史

的背景とその意義―安史の乱以前の二度の会盟を中心に」というタイプの別稿を『日本西蔵学会々報』五六号に投稿する予定。

- (5) 『三國史記』新羅本紀第八・聖德王三十四(七三三)年(井上秀雄訳注『三國史記』一卷、平凡社、一九八〇、二七八頁)。井上秀雄「新羅統一王朝」『東アジア世界における日本古代史講座』六卷、学生社、一九八二、末松保和「新羅の郡県制、特にその完成期の二三の問題」『学習院大学文学部研究年報』二二輯、一九七四、木村誠「統一新羅の郡県制と浪江地方経営」『朝鮮歴史論集』上(龍溪書舎、一九七九)、李成市「新羅兵制における浪江鎮典」『早稲田大学大学院・文学研究科紀要』別冊七集、一九八〇。
- (6) 契丹と奚は常に行動を共にした為、唐は両部族を併せて兩蕃と称した。『旧唐書』卷一九九契丹伝・奚伝、『新唐書』卷二一九契丹伝・奚伝。田村実造「唐代に於ける契丹族の研究」『滿蒙史論叢』一号、一九三八、拙稿「唐代の契丹と突厥第二可汗国」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』八号、二〇〇九。
- (7) 『文苑英華』卷九七二「兵部尚書代国公贈少保郭公行状」、森安(2)論文二四頁。
- (8) 『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八「外臣部盟誓・開元六年十一月。森安(2)論文三〇〇三三頁、拙稿「唐玄宗『御製御書』闕特勤碑文考―唐・突厥・吐蕃をめぐる外交関係の推移」『史窓』五八号、二〇〇二、三三六〜三三七頁、三三九頁注三三。
- (9) 森安(2)論文三三三三頁。王堯・陳踐訳注『敦煌本吐蕃歷史文書』(民族出版社、一九九二)一五一頁。
- (10) 『冊府元龜』卷九九九外臣部互市・開元十五年、『資治通鑑』卷二二三・開元十五年閏九月丙戌。拙稿(8)論文三三六頁。
- (11) 『資治通鑑』卷二三・開元十五年九月。森安(2)論文六八頁注一八。
- (12) 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係―新羅外交史の一試論」『朝鮮学報』一〇七号、一九八三、一六〜二〇頁、菅沼(1)論文八〜九頁。
- (13) 神龍会盟と公主降嫁については『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八「外臣部盟誓・開元二年五月、卷九八「外臣部盟誓・開元六年十一月、『資治通鑑』卷一〇八・景龍元年四月辛巳、佐藤(2)論文三九二頁、四二二頁、四三八〜四三九頁等、鈴木隆一「吐蕃と吐谷渾の河西九曲」『史観』第二〇八冊、一九八三。尚、唐・吐蕃の会盟は漢文史料で確認できるものだけでも十回あり、うち二回は中止、一回は偽盟であった。
- (14) 『旧唐書』卷七中宗紀、『新唐書』卷二七點戛斯伝、『冊府元龜』卷九七四外臣部褒異一・景龍二年十二月、『資治通鑑』卷二〇九・景龍二年三月丙辰。内藤みどり『西突厥史の研究』(早稲田大学出版部、一九八八)三五八〜三六二頁。
- (15) 『旧唐書』卷一九九渤海靺鞨伝、『新唐書』卷二九室韋伝。濱田耕策『渤海国興亡史』(吉川弘文館、二〇〇〇)一五頁。
- (16) 『文苑英華』卷四五九「命呂休璟等北伐制」、『唐大詔令集』卷二三〇。
- (17) 佐藤長「磧西節度使の起源と其の終末・上」『東洋史研究』七編六号、一九二八、一〇〜一六頁。
- (18) 『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二〇・景雲元年。森安(2)論文二六〜二七頁。

- (19) 『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二一〇・景龍元年、『冊府元龜』卷九八八外臣部奸詐。
- (20) 『資治通鑑』卷二一・開元二年十二月甲子。
- (21) 『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二一・開元二年五月己酉〜十月乙酉。
- (22) 『資治通鑑』卷二一・開元三年十一月、開元五年七月。
- (23) この前後の事情に関しては『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二一・開元六年十一月戊辰、開元七年六月戊辰、伊瀬仙太郎『中国西域経営研究史』(巖南堂書店、一九六八)三二六〜三三八頁、金子(2)論文一八〇〜一八一頁。
- (24) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『資治通鑑』卷二一・開元四年六月癸酉、八月辛未。
- (25) 突厥包圍作戦については『旧唐書』卷九三王峻伝・突厥伝、『新唐書』卷二一王峻伝・突厥伝、内藤みどり「突厥による北庭のバスマル攻撃事件」、『東洋学報』八一巻四号、二〇〇〇五九四〜五九五頁、六〇三頁、可突于の乱については『旧唐書』『新唐書』契丹伝、田村(6)論文三三頁、拙稿(6)論文五〜八頁を参照。
- (26) (9)を参照。尚、七二〇年の突厥の吐蕃への使節派遣について、森安孝夫氏は(2)論文三三頁において、突厥の北庭・河西攻撃に関連すると考察している。
- (27) 拙稿(6)論文八〜九頁。
- (28) 『旧唐書』突厥伝、『冊府元龜』卷九七九外臣部和親・開元九年。護(2)論文二〇〇頁、拙稿(8)論文三三一頁。
- (29) 『冊府元龜』卷九八〇外臣部通好・開元九年二月丙戌、『資治通鑑』卷二二一・開元九年二月丙戌。拙稿(8)論文三三七頁。
- (30) 『資治通鑑』卷二二一・開元九年、卷二三・開元十四年四月辛丑。
- (31) 『旧唐書』玄宗紀、『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二三・開元十五年九月丙子〜閏九月庚子。
- (32) (10)を参照。
- (33) 『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷三五八將帥部立功十一・趙頤貞、卷三六六將帥部機略六・張守珪、卷三六九將帥部攻取二・信安王禕、卷四一一將帥部間諜・蕭崇、『資治通鑑』卷二三・開元十六年〜開元十七年。
- (34) 『旧唐書』『新唐書』玄宗紀・吐蕃伝、『冊府元龜』卷九七二外臣部朝貢四・開元十八年十月、同年十二月、卷九七五外臣部褒異一・開元十八年四月、卷九七九外臣部和親二・開元十八年十月など。佐藤(2)論文四六一〜四六五頁、(4)・(49)・(50)も参照。
- (35) 古畑(2)論文、佐藤(2)論文。
- (36) 『旧唐書』『新唐書』玄宗紀、契丹伝。拙稿(6)論文九〜一一頁。
- (37) 『冊府元龜』卷九九九外臣部請求・開元十九年十一月。
- (38) 筆者は(8)論文で、この時期の北方情勢(突厥)と西方情勢(吐蕃)の相関についてふれ、西方情勢が不穏であった為、玄宗は突厥との友好関係を重視したと考察した。
- (39) 『旧唐書』『新唐書』玄宗紀・契丹伝、『資治通鑑』卷二三・開元二十年三月己巳。『文苑英華』卷六四七「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」。
- (40) 拙稿(6)論文一〇〜一一頁、二三頁注四三。
- (41) 『旧唐書』渤海靺鞨伝、『新唐書』卷二九渤海伝。
- (42) 古畑(2)論文二五頁。

- (42) 『資治通鑑』卷二三・開元二十一年正月庚申、『三國史記』新羅本紀第八・聖德王三十二年(七三三)七月(井上訳注『三國史記』二七五頁。古畑(2)論文二六頁。
- (43) 『旧唐書』『新唐書』玄宗紀・契丹伝、『資治通鑑』卷二三・開元二十一年閏二月癸酉、『文苑英華』卷六四七「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」。小野川(3)論文六四頁、一三七頁注一六〇、古畑(2)論文二〇〇二二頁、拙稿(6)論文一〇〇二二頁。
- (44) 拙稿(6)論文七〇八頁。
- (45) 『冊府元龜』卷九七三外臣部助國討伐・開元二十二年二月。(42)も参照。
- (46) 古畑(12)論文一六〇二〇頁、菅沼(1)論文八二〇頁。
- (47) 古畑(12)論文五三〇五四頁。
- (48) 李成市「三國の成立と新羅・渤海」『朝鮮史』山川出版社、二〇〇〇一〇九頁。
- (49) 『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二三・開元十九年九月辛未。(34)も参照。
- (50) 『冊府元龜』卷六五三奉使部称旨・李嵩、卷九七九外臣部和親二・開元二十二年二月、『資治通鑑』卷二三・開元二十二年二月丁酉。(4)も参照。
- (51) 佐藤長『チベット歴史地理研究』(岩波書店、一九七八)一四二頁。
- (52) 『旧唐書』卷一〇三張守珪伝、『新唐書』卷二三張守珪伝。佐藤(2)論文四六四〇四六五頁。
- (53) 『曲江集』卷八「勅新羅王金興光書・第一首」。古畑(2)論文二六頁。
(5)も参照。
- (54) 『冊府元龜』卷九七九外臣部和親二・開元三十二年四月(岑仲勉『突厥集史・上冊』中華書局、二〇〇四、四三四頁は、三十二年を二十二年の誤りと考証。護(2)論文二〇二頁、二〇六頁、古畑(2)論文二六頁、三三頁注五〇。
- (55) 『新唐書』玄宗紀、『資治通鑑』卷二四・開元二十二年六月壬辰。岑仲勉(54)文獻四三八頁、古畑(2)論文二二頁表一、三三頁注三。
- (56) 『文苑英華』卷六四七「為幽州長史薛楚玉破契丹露布」に「突厥銳而逃、渤海懼、勢未敢出」とある。古畑(2)論文二二頁、拙稿(6)論文二二頁、二四頁注五一。
- (57) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、ビルゲ可汗碑文南面十行目。小野川(3)論文六四頁、大澤(3)論文。梅録嘜は開元十五年九月、吐蕃の密書を携えて唐に派遣された。(10)参照。
- (58) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『冊府元龜』卷九七五外臣部褒異二・開元二十二年十二月庚戌、ビルゲの死後、伊然と登利が相次いで即位したが、史料によって治世期間が異なる。本稿は護(2)論文二〇八二〇九頁に従い、可汗を登利とした。
- (59) 『旧唐書』『新唐書』玄宗紀・契丹伝、『資治通鑑』卷二四・開元二十二年六月壬辰、十二月乙巳、開元二十三年。田村(6)論文三七頁、拙稿(6)論文二二頁。
- (60) 『曲江集』卷九「勅渤海王大武芸書・第一首」、『冊府元龜』卷九七二外臣部朝貢四・開元二十三年三月。尚、勅書の作成時期は不明である。石井正敏氏は開元二十四年三月頃に作成されたと考察し、古畑徹氏は、開元二十三年三月に渤海が唐に遣使し、勅書はこの時に作成されたと考察した。本稿は古畑氏の説に従う。石井正敏「張九齡作「勅渤海王

大武芸書』について『朝鮮字報』一二二号、一九八四、古畑徹「張九齡作『勅渤海王大武芸書』と唐渤海紛争の終結」『東北大学東洋史論集』三輯、一九八八。

(61) 『曲江集』卷八「勅幽州節度使張守珪書・第三首」、卷十三「論東北軍未可輕動狀」。

(62) 『曲江集』卷十四「賀破突厥狀」「賀東北累捷狀」等。古畑(60)論文四五～四八頁。登利可汗の契丹遠征については拙稿(6)論文二五～一六頁を参照。

(63) 佐藤(2)論文四七〇～四七一頁、王堯・陳踐訳注(9)論文一五三頁。

(64) 『曲江集』卷十二「勅吐蕃贊普書・第三首」。

(65) 『旧唐書』玄宗紀、『資治通鑑』卷二二四・開元二十三年十月戊申、開元二十四年正月。

(66) 『曲江集』卷十一「勅突厥可汗書・第一首」。

(67) 『曲江集』卷十一「勅突厥可汗書・第四首」「勅突厥可汗書・第五首」。

(68) 『冊府元龜』卷九七五外臣部優異二・開元二十四年三月。

(69) (5)(45)(53)を参照。

(70) 『冊府元龜』卷九七一外臣部朝貢四・開元二十四年六月。

(71) 濱田(15)文獻三六～三七頁、石井正敏『東アジア世界と古代の日本』(山川出版社、二〇〇三)二〇～二六頁。

(72) 『新唐書』卷三二二小勃律伝、『冊府元龜』卷三五八將帥部立功十一・張崇、『資治通鑑』卷二二・開元十年。佐藤(2)論文四六八～四六九頁、森安(2)論文三三頁、三七～三八頁。

(73) 『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』卷二四・開元二十五年二月己亥、開元二十六年三月、開元二十六年六月辛丑。佐藤(2)論文四七二～四

七六頁。

(74) 『旧唐書』卷一九七南詔蛮伝、『新唐書』卷三三南詔伝、『冊府元龜』

卷九六四外臣部封冊二・開元二十六年九月、『資治通鑑』卷二四・開元二十六年九月戊午。藤澤義美「南詔国の成立と吐蕃との関係」『東洋史研究』二五巻二号、一九六六(二〇七)二〇八頁、林謙一郎「南詔国の成立」『東洋史研究』四九巻二号、一九九〇。

(75) 『曲江集』卷十「勅舊州都督許客物書」、卷十二「勅蒙煒義書・第二首」。

(76) 『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二・開元二十六年十月。金子(2)論文五九九頁。

(77) 『冊府元龜』卷九六四外臣部封冊二・開元二十八年。護(2)論文二〇八頁。

(78) 田村実造『中国征服王朝の研究』上(東洋史研究会、一九六四年)、毛利英介「澶淵の盟の歴史的背景―雲中の会盟から澶淵の盟へ」『史林』八九巻三号、二〇〇六、古松崇志「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』九〇巻二号、二〇〇七。

(79) 『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元龜』卷九八一外臣部盟誓・建中四年正月、長慶元年九月。佐藤長『古代チベット史研究』下(東洋史研究会、一九五九)、拙稿(4)論文。尚、「奉天盟誓」は、朱泚の乱の時、奉天に避難中の徳宗が吐蕃と交わした盟誓で、吐蕃軍が長安を回復後に徳宗が褒賞として安西・北庭を割譲し、毎年絹一万段を下賜する事を約した(『陸宣公奏議』卷十「賜吐蕃將書」、卷十六「興元賀吐蕃尚結贊抽軍回帰狀」等)。

表：8世紀前半における突厥・吐蕃に対する唐の外交戦略の大局的な推移

吐蕃・突厥に対する唐の外交戦略	契機	背景(北方の情勢・西方の情勢)	推移	結果
景龍4年(710) 吐蕃と和して、突厥に兵力集中 「親西伐北」	吐蕃王チンドゥーソンの戦死が契機となり、吐蕃が和睦を請願。 唐は、706年、吐蕃と会盟し、710年、金城公主を吐蕃に降嫁させた。	唐は、吐蕃とも突厥とも対立していた。 吐蕃と突厥は701年には連合して涼州を挟撃し、唐に脅威を与えた。	吐蕃との和睦により、唐は突厥対策に専念でき、710年、突厥包囲攻撃を計画したが、中宗暗殺という突発事件のため突厥攻撃は中止。	吐蕃は唐を侮り、河西九曲を公主の化粧料として奪取、開元2年(714)に同地を前進基地として入寇再開。
開元15年(727)に突厥と和し、 開元16年(728)～17年(729) 吐蕃を集中攻撃 「親北伐西」	開元15年、突厥のビルゲ可汗が吐蕃の密書を玄宗に献上し、唐・突厥の和睦が成立。	唐は、吐蕃とも突厥とも対立していたが、突厥に対して軍事的外交的圧力を加え、経済的な利も示して帰順へと導いた。	開元15年の突厥の帰順によって、北辺防備を憂慮する必要がなくなったので、開元16～17年、吐蕃に対し河西・隴右で波状攻撃し、開元18年に吐蕃を屈服させる。	開元18年より唐・吐蕃は和平交渉を開始。
開元18年(730)～21年(733)に吐蕃と和睦交渉し、 開元22年(734)～23年(735) 北方戦線に専念 「親西伐北」	開元18年、契丹の可突干が再度の乱を起こし、突厥・渤海とも連繫して唐と対決。開元21年、契丹・突厥・渤海連合軍は唐軍を撃破する。	開元16年～17年、唐が吐蕃に集中攻撃を行っており、唐の西方での有事は、突厥・契丹にとっては勢力伸張の好機と映ったかも知れない。	唐は開元18～21年、吐蕃と和睦交渉して休戦。また唐は開元21年、新羅に渤海征伐を命令し、突厥・契丹・渤海連合に対して反撃に転じる。	開元22年～23年、唐は北方情勢に専念し、開元22年に契丹を帰順させ、開元23年には渤海・突厥を帰順させた。

年表：開元20～23年の唐と周辺諸国の外交関係を中心とした東部ユーラシアの国際情勢の推移

元号(西暦)	吐蕃	突厥	契丹	渤海	新羅
開元20年(732)	唐・吐蕃間で和睦交渉。 正月 尚它碑が李行緯と共に吐蕃に帰国。7月 論紇野贊が来朝	ビルゲ可汗が契丹に援軍を派遣。 玄宗撰文書写のキョル・テギン碑文が建てられる。	3月 唐軍が契丹・突厥連合を撃破。 可突干は突厥に再度の援軍要請。	9月 渤海が登州(山東省)を襲撃し登州刺史を殺害。	
開元21年(733)	正月 李暉が吐蕃に赴き金城公主に会う。2月 金城公主が玄宗に境界碑の立石を提案。玄宗は、青海南の赤嶺を国境とし、境界碑を建てる。	閏3月 榆関都山の戦い。契丹・渤海・突厥連合軍 対 唐軍 唐軍は大敗し、司令官である幽州道副総管の郭英傑は戦死。			正月 玄宗は新羅に対し、渤海討伐を命令。7月 玄宗からの渤海討伐命令が新羅に届く。 冬、新羅軍が渤海討伐に出撃するが失敗。
開元22年(734)	王女を突騎施に嫁がせる。	4月 ビルゲが唐に遣使して、公主降嫁を許可された事を感謝する。 10月26日 ビルゲが毒殺される。 12月 ビルゲの死を知った玄宗は、可汗の死を悼む。	4月 新任の幽州節度使・張守珪が契丹軍を撃破。 12月 唐の教唆によって、可突干と契丹王屈烈が謀殺される。	渤海軍は契丹から撤退。 (新羅が渤海の牽制になったと思われる)	2月 新羅が玄宗に渤海再討伐を申し出る。 7月 玄宗が新羅に渤海再征伐を命令。
開元23年(735)	開元25年(737)、吐蕃が小勃律を攻撃。開元26年(738)、吐蕃が河西に入寇。唐は河西・隴右・劍南から吐蕃に対して一斉攻撃し、唐・吐蕃間は戦争再開。	5月27日 ビルゲの葬儀。 玄宗はビルゲの碑文・廟づくりに協力。 7月～9月 登利可汗は契丹に遠征するが、契丹・唐連合軍に敗北。	7月～9月 契丹の泥禮が、唐の將軍達と協力して、攻め寄せた突厥軍を撃破する。	突厥は契丹征伐にあたり、渤海にも出撃を命令したが、大祚栄はこれを拒絶し、突厥の契丹侵攻を唐に報告して帰順した。	玄宗は、帰国する金義忠に対し、新羅による大同江以南の領有を承認し、大同江以南に駐屯する許可も与える。